

# 現在の東アジア情勢の下での日韓関係

鄭 在 貞

ソウル市立大学校教授

## Korea-Japan Relations under the Current East Asia Situation

Jaejong CHUNG

Professor, University of Seoul (UOS)

### 講演

本講演は、2014年11月26日、京都産業大学にて行われたものである。

### 歴史的視点から見た韓日関係

現在の韓日関係は葛藤に包まれており大変難しい。どう乗り越えるか。紅葉の季節の京都を訪れたこの機会に、もう一度考えてみたい。自分の専門は、歴史であり、歴史的観点の特徴は、長いスパンで物事を考えることにある。自分は2005年に京都の国際日本文化研究センターで一年研究をした。その時、京都の市内をくまなく回りながら、韓日関係が長く深い歴史的な関係を持ち、京都には多くの場所にその痕跡が残されていることに改めて思い至り、びっくりした。そこで、京都を窓口にして韓日関係の通史が書けるのではないかと思い、帰国してから韓国語で《京都からみた韓日通史》(2007年)という本を記した。現在の韓日関係は、この2000年にわたる文明の相互影響なしに語ることはできない。

京都が平安京として最初に形成された時に、渡来人の努力が非常に大きかった。広隆寺は新羅系の秦河勝という人がつくり、八坂、稲荷、加茂など大きな神社の多くには、渡来人の祖先を祀るものがある。比叡山の延暦寺には、新羅の張宝高という大貿易商人の助けを得て唐に留学した円仁のゆかりがある。円仁は自分の有名な日記で唐で活躍する新羅人の話を詳しく描いている。高山寺には同じく新羅の著名な僧侶である元暁と義相の絵巻物が残っている。住職明恵上人は彼らを尊敬した。

中世・近世になってからも京都は韓半島との交流の中心地だった。今の京都の形を創ったのは豊臣秀吉だが、朝鮮を侵略した文禄慶長の役の痕跡は、耳塚のような形で鮮明に残された。徳川時代の平

和的な交流の時代が来てからも、儒学者と貿易商の交流の中心地は京都だった。通信使は京都に多くの文章をもたらした。貿易商人は、日本の銀を媒介にして朝鮮人参や中国生糸を売買した。西陣の織物が声価をあげたのもこのおかげだった。

やがて京都で明治維新が起る。そして京都を震源地とする日本の近代文明が朝鮮に伝えられた。朝鮮は、日本化された西欧文明を吸収するが、新旧文明の狭間の中で、日清・日露・韓国併合へとつながっていった。1920年代以後、朝鮮から京都に労働者と留学生がたくさんきた。そのなかから二人の帝国大学教授も生まれた。戦後、李泰圭はソウル大学文理学部の学長、李升基はソウル大学工学部の学長となった。その後、前者は韓国で、後者は北朝鮮で物理学と化学の発展に貢献した。独立運動に携わった人たちもおり、韓国人が一番すきな青年詩人尹東柱は福岡の刑務所で死んだ。韓国人の民族情緒をうまく詠ったといわれる鄭芝溶も京都で学んだ。

### 1965年の韓日条約をどう見るか。

さて、来年は1965年の韓日国交回復から50周年という歴史の節目だが、長い歴史のスパンでこの65年の合意というものをもう一回考えてみたい。この時、基本条約と四つの関連協定がむすばれた。こういう合意がなされたのは、第一に、植民地支配を清算して新国家関係を創るためだったが、これは難しい問題となった。韓国はサンフランシスコ平和条約の当事者になりたかったが、それは受け入れるところにならなかった。同条約の発効から14年たってようやく交渉が妥結したが、植民地支配をどう見るか、1910年の併合条約が有効か無効かについて双方の立場は乖離、結局、「もはや無効」という表現を持って妥協が成立したのである。

この合意に至る第二の要因は、冷戦が激化する中で、アメリカが反共の立場を強化するためにも韓日の提携を求めたことがあるであろう。更に第三に、韓国経済の立て直しのためには、日本との外交関係を再開する必要があったのである。

かくて条約は成立したが、植民地支配にたいする観点からは、当時の日本側の認識は今の日本側の認識とは随分ちがっていた。条約を最後にまとめるために韓国を訪れた椎名悦三郎特使が「遺憾」と述べたのみであり、条約文に「謝罪と反省」という言葉はなかった。交渉自体も、「植民地支配が韓国のためになった」という日本側代表の発言を「妄言」として交渉は数年も中断されたのである。

賠償の問題についても両者の意見は全くくいちがっていた。韓国側が、植民地支配に対する賠償を求めたのに対し日本側はこれを認めず、結局、「請求権・経済協力に関する協定」ということで妥協が成立した。しかもこの交渉では、慰安婦・サハリン韓国人・韓国人被爆者の問題は全くとりあげられていなかった。独島の問題が最後まで決着つかず、日本側は「紛争に関する交換公文」でこの未決着の問題が今後の対象となると主張したのに対し、韓国側は存在しない領土問題が公文の対象にはな

りえないと主張したのである。

更に、北朝鮮問題が完全に取り残されたことも事実である。政治的には、韓国側では、この合意に対する猛烈な反発が起き、戒厳令下での条約締結の運びになった。従って、韓国側で国民的な支持があったというわけにはいかないが、それでも、今の韓日関係は、この65年合意を基礎として発展したということも間違いがないのである。

### 50年間の進展を肯定的に評価すべし

さて、それでは今後どうしたらよいか。韓国側には、65年合意が植民地支配の問題を解決していない以上、これをやり直すべきだという意見もでてきている。しかし、これには日本が応じるはずがない。自分よりもっとも重要なことは、過去50年の間に現れた変化を総括的に評価し、達成されたことは認め、まだ不十分なことはそれを補うことが必要だと思う。

植民地支配に対する日本人のものの見方は随分変わってきたと思う。第一に、謝罪と反省が拒否される状況から、特に90年代前半以後なると、多数の謝罪と反省を認める発言があいついだ。93年非自民政権が生まれ細川護熙総理が「侵略」と「支配」を認め、これが結局95年の村山富市総理の談話になっていく。この談話の内容は、65年条約では考えられないようなものをふくむ。更に、98年の金大中・小渕共同声明は、小渕総理が韓国を直接に明示して植民地支配への反省と謝罪を述べ、金大中総理がこれを高く評価するという形をとった。2002年の平壤宣言では、小泉総理はほとんどこの時の小渕総理と同じ考えを表明した。2010年に菅直人総理が発出した韓国併合100年についての総理談話は、「韓国人の意思に反した植民地支配」という表現が入り、韓国側が希望したように「1910年条約無効」という表現にはいたらなかったものの、1910年条約が無理やり結ばれたというニュアンスがでたのである。

第二に、教科書問題の進展がある。日本の教科書は、改善されてきたと思う。82年に教科書問題が発生した後の「近隣諸国条項」はアジアの視点を含めて記述する方向がでたし、その後の中学校教科書には、慰安婦問題の記述が大幅に増えた時期もあった。近隣諸国と協力して歴史教材を創っていくという試みも始まり、すべての事項についての共通記述はできなくても、両論併記、ないしは、共通点の抽出のような試みが始まった。

第三に、賠償の面でも変化が生じた。65年交渉では全く取り上げられなかった慰安婦・サハリン韓国人・韓国人被爆者の問題については、日本政府は法的観点ではなく人道的・道徳的観点から抛出に応ずるという措置をとってきた。韓国にもどったサハリン残留韓国人に対してはアパートの建設が行われ、慰安婦に対しては、一部にとどまったにせよ、河野談話をうけたアジア女性基金による償い金や医療支援が行われた。韓国人被爆者への給付も限定的な形ではあるが開始された。

1965年条約によってすべての問題が解決済という立場に立つならば、このような措置はおかしいと

ということになる。しかし、条約そのものでは足りなくても、その後50年をかけてこれを補充してきたと考えるなら、相互理解は深化し、信頼関係は強化してきたということになる。

### 今の韓日関係と留意すべきこと

戦後の両国の発展の中で、日本側には、民主主義・平和・人権の高まりがあった。韓国側の努力もたいしたものがあり、民主化運動によって、与えられたものではない民主主義をつくってきた。韓国の経済発展も、その出発点で日本からの経済支援があったが、韓国側がこれを無駄にしないぞという覚悟で頑張り、いまは日本との経済格差を縮めるようなところまできた。総じて韓国は、民主化と経済発展で自信を持つ国になってきた。日本も韓国もお互いの発展という意味で成功した関係になったのである。

そのように考えるなら、韓日の困難な問題を解決する糸口を見出すのは難しくはないのではないか。2000年の韓日関係の歴史の中で、初めて両国は、お互いに相補うという役割を模索する時代に入った。しかし、まだその新体制が形成されていないのである。日本と韓国がお互いに新しい文明の境にいることを、歴史的視野に立って考えなくてはいけない。

100年前の韓国は、東アジアにおけるクジラの喧嘩にエビのような存在でしかなかった。今、韓国はイルカくらいに成長し、アメリカ、中国、日本、ロシアと言ったクジラの喧嘩の中でどういう役割を果たすか模索している。日本は敗戦にもかかわらず、アメリカにつぐクジラになったが、ここに中国という大国が現れ、今や大きなクジラとしてふるまい始めている。そこで、日本はクジラとしての役割をどうこなしたらいいか、いつのまにかイルカになった韓国とどう付き合うのか、模索しているように見える。

韓国と日本のそういう今の動きを見てみると「あぶないなあ、やりすぎではないか」と思う側面もある。危険なことは、双方で、これまで蓄積しつつあった成果を壊したり、共通の認識を無視することである。例えば、①「侵略戦争」を否定するような発言を公人がすること。②独島について、お互いにナショナリズムをあおるような対応をすること。③1965年体制を根本から変えねばならないというような論調をはること。④近隣諸国条項を削除しようとする。⑤安倍談話を新たにだすことにより、50年間進展してきた歴史認識を変えようとする。こと等である。

### 韓日共栄のための具体的なプロジェクト

それでは、65年条約をへて50年たった来年に何をしなくてははいけないか。短期的には、65年体制の上にとって、これを補完してきたものでまだ足りないことを実施することである。①先ず慰安婦問

題について、できるだけ早くこれを解決する。②次に領土問題についてこれを解決することはできなくても、これと関連して、韓日がともに利益になる平和の海を創っていく。③両国の関係者、学者、リーダー、マスコミ他が共通の理解を深める。④首脳間の対話と信頼の強化の道筋をつける。

中長期的には、これからの50年をどのようにして両国関係を進めるのがいいか。第一の提案は、双方によって「韓日未来財団」のようなものをつくることである。これには、両国政府、これまで両国関係に関わりのあった企業、韓国側のPOSCOや高速道路公団、日本側の三菱や新日鉄のような企業が参加して、歴史問題から派生する具体的問題でさらなる補完措置をとる方が望ましい。

第二の提案は、東アジアにおいて、民主主義・人権・平和・自由等共通の価値観を共有する国同士として、また、2000年の歴史関係を共有する国同士として、また、人口減・高齢化・経済力の相対的衰退という共通の現象を持つ国同士として、夢を語り、一緒にできる壮大なプロジェクトを考えられないか。例えば、日本と韓国の間を地下のトンネルで結び、日本からユーラシア大陸を通じてロンドンにいたる、鉄道線を敷く案もあろう。また、様々なアイデアをもちよって、韓国の東側に位置する海を平和と友好の海にし、東アジアの「地中海」とする案もあるだろう。

いずれにせよ、本当に未来志向でこれからの韓日関係を考えていきたい。

## 参加者との討論

最初にゲストコメンテーターとして、ロバート・D・エルドリッジ在沖縄米軍海兵隊外交政策部次長から詳細かつ網羅的なコメントがあり、鄭教授がこれに応えた後、出席者全員からのコメントないし質問があり、活発な議論が行われた。コメント者の名前は略し、主な解答のみを以下に記録した。

(質問：日本滞在によって感じた日本の変化)

自分は元来歴史学に志し、特に植民地時代の韓国の研究をしたかったが、昔の韓国では、親日派への負い目から、客観的な研究ができず、一次資料が日本にあった。そこで、日本に来て研究をしたいと思い、1979年から三年間東大で勉強をした。この間日本における韓国のイメージも、日韓関係もまったくちがっていた。東大赤門の横に赤い字で書いた立て看板がいつもあり、それは、常に韓国の独裁政治と人権抑圧を批判するもので、自分の滞在中、一日たりとも気持ちが晴れることはなかった。それから比べると日本から見た韓国のイメージの変化はさながら別世界の感があり、特に、98年の小淵・金大中共同声明、2002年のワールドサッカー共同開催のころに、両国関係は頂点に達したと思う。

(質問：韓国における反日教育と対日観)

成功し自信を持ち始めた韓国の対日感情は、時にして相手をバカにするものであり、これは韓国自

らを貶めることになる。イルカになった韓国がクジラにはなれない中で、自分の位置をまだ見いだせないでいる結果だと思う。そこで日本がやってきたことについて、植民地時代もその後も、正当に評価できなくなっている。

韓国での日本に関する教育を一概に反日教育とはいえない。韓国の歴史教科書の近代編は毎ページ日本が出てくる。韓国の近代史は日本を抜きにしては語れない。そこでの日本は決していいイメージではない。事実として、侵略者ないし支配者なのだから、それを教えることを反日教育とはいえない。ただ、戦後の韓日関係をあまり教えないのはよくない。自分が強調したように、戦後韓国と日本は切磋琢磨しながらお互いに協力しあってともに発展した。この点をもっと教えるべきだ。

(質問：歴史認識の乖離と接近)

歴史問題の完全な解決は無理である。山登りのように、頂上を極めれば、目的を達成したというようにはいかない。しかし、歴史認識で共通の見解は達せられなくとも、違った見解をもったまままで、共通の部分を探り出すべく努力をすることはできる。自分は、1997年から2007年、日本、韓国それぞれ20人の学者で集まり、共通認識が成り立つ部分のみを絞って歴史を書く作業をやった経験がある。一致できない点は多くても、お互いに学ぶ点はたくさんあった。

(質問：植民地遺産と南北の相違)

この分野での世界的な研究レベルはあがってきている。各種の統計が使われ、本国から植民地に対して行った投資についても理解が深まっている。韓半島では、北朝鮮が介在していることによって状況が不透明になっている。日本が行った工業投資は大部分が北側にある一方、その後の朝鮮戦争で壊されたものも多かった。他方北朝鮮は、戦前の天皇制の独裁的な側面とスターリニズムを吸収し、閉ざされた政治形態をつくっていった。韓国では朝鮮戦争の結果米国の支援と影響力が飛躍的に拡大した。米国の支援は、日本が残した財産と同じくらいだと推計されている。その結果、西欧化が進み、開かれた国になっていった。

(質問：韓国における歴史教育と日本)

特別の反日教育をしなくても、韓国における日本の位置は、これまで戦前が重点になっていた。江華島事件から始まり1945年に終わる70年の韓国の歴史教科書の近代史部分は160ページくらいあるが、そのページの中で、日本が登場しないページはないといってもよい。ところが、1945年から現代にいたる80ページほどの70年の戦後史において日本が登場するのは1965年の国交回復、80年代の教科書問題、そして最近の独島問題の三か所くらいである。この状況を是正するのは韓国にとって大きな課題であり、教育課程（日本の学習指導要領）の改正が必要である。

(質問：国際法と韓日関係)

国際法の原則は極めて重要であり、1965年条約もそういう意味では、戦後秩序を創ってきたものとしてとても尊重すべきである。しかし、一つの条約の枠組みができたからといって、それですべての問題が実際に解決したと考えることはできない。自分が主張したいのは、あれから50年の間に日本側はいろんな面で肯定的な蓄積をしてきたということである。ともすれば、韓国の一部で「日本は何もしていない」と言って日本批判を繰り返すのは事実と反するものがある。

(質問：韓日の構造的な対立があるか否か)

韓日両国が相対的にともに豊かになり共存の基礎が強まったはずなのにどうしてこれだけ関係が悪いのか、そこには、歴史的・地政学的な対立要因がある。それが今一挙に顕在化したのではないかという点は、興味深い指摘ではあるが、韓国と日本が離婚を不可避とする夫婦だとは自分は思わない。しかし、イルカになったばかりの韓国がクジラだったがその立場が弱くなった日本をバカにするふんいきがあり、これは日本の実情を無視するものである。日本の実情をもっと知らねばならない。

例えば、最近の両国における朱子学の研究は、明治維新を朱子学を基礎とする侍のロジックを用いた革命ととらえ、これは日本と前近代における朱子学のメッカ韓国を共通の立場に置くことになる。文明論的に言えば、韓国と日本は、幼い日と一緒に過ごしその後分かれて生活してきた双子の兄弟のようなものとも言われる。協力し合って歴史の共通性を深めるなら、共存の余地は大きくなる。

(了)